

朱漆弓、黒漆矢、金箔懸地塗の矢立て

この、檀製の弓、30本の羽付きの矢と装飾の施された2腰の矢立ての一式は、京都の天皇に仕えた武将、源頼義（988-1075）が1063年に鎌倉に初めて八幡宮を創建したことで歴史的にも重要なつながりがあります。頼義は1051年、謀反を起こした武士を鎮圧するために東北地方に派遣されましたが、京都を出発する際に、源氏の守護神であり、武家の守護神でもある八幡神を祀る石清水八幡宮に参拝し、神の加護のしるしとして弓道具一式を授けられました。東北征伐に成功し、京都に帰る途中で鎌倉に立ち寄った頼義は、八幡神を祀る神社を創建し、2本の弓（1本は1807年の火事で焼失）、矢と矢立てを奉納して感謝の意を表しました。この弓道具一式は、頼義の子孫、源頼朝（1147～1199年）の創建後、鶴岡八幡宮に継承され、以来神社で大切に守られてきたものです。国宝に指定され、鎌倉国宝館に寄託されています。